二〇一七年度

東京都公立高校入試問題

五〇分
一〇〇点

一

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 赤ん坊の屈託のない笑顔に心が和む。

(2) 垣根を隔てて、梅の香が漂ってくる。

(3) 体操選手の見事な跳躍に歓声が上がる。

(4) インターネットで貨幣の歴史について調べる。

(5) 誕生日に買ってもらった新しいコートに袖を通す。

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	てて			

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

二

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 情報技術がイチジルしく進歩する。

(2) 決勝でゼンセンしたチームに観衆が拍手を送る。

(3) 自然と調和した町作りに必要なザイゲンを確保する。

(4) 明治時代に建てられた、れんが造りのヨウカンを訪ねる。

(5) 新人監督の作品が世界的な映画賞を受賞し、脚光をアびる。

(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
びる				しく

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製･転載を禁止します。

三

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

> 中学二年生の市居一真（いちいかずま）は、かつて一度だけ見た祖父が描いた絵に心を惹（ひ）かれ、画家になりたいと思っていたが、父の一成（かずなり）からは理解を得られずにいた。ある日、その絵は、今でも屋根裏部屋に置いてあると母の祥子（しょうこ）から聞き、一人で見に行くことにした。

壁際（かべぎわ）には、古い家具が並んでいた。

取っ手のとれたタンス、ほこりをかぶった箱形のテレビ、脚の取れた小さなちゃぶ台。どれも傷んで、ぼろぼろになっている。今では、古道具屋でしかお目にかかれないような代物だ。

「屋根裏部屋には、おばあちゃんの遺品が置いてあるわ。その中に、おじいちゃんの絵があるはずよ。」

鍵を手渡しながら、祥子が言った。

「あの花火の絵が……。」

「そう。あの絵ね。おばあちゃんもとても気に入っていたんですって。この絵だけは保管して欲しいって、何度もお父さんに頼んだそうよ。お父さん、仕方なく、おばあちゃんの遺品といっしょに屋根裏にしまい込んだの。まさか、あんたが見つけるなんて。見つけて、心を惹かれるなんてねえ……。」

祥子はそこで深いため息を吐いた。

「こういうことって……、何て言うんだろう、運命？　そう、運命ってほんとうに、あるのかしらね。」

祥子は考えるように、しばらく目を伏せた。それから、顔を上げ一真の肩を手のひらで叩（たた）いた。

「運命か、そうでないのか、あんたの目で確かめてきなさい。」

うなずいて、鍵を握りしめた。そして、今、ここにいる。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

どこにあるのだろう。あの絵は。

(1) 薄暗い室内に視線を巡らせる。目を凝らす。

タンスの後ろに白い布の包みが見えた。四角い大きな包みだ。一真は近寄り、そっと引き出してみる。

白布で梱包（こんぽう）されたカンバスだ。

手触りでわかる。*五十号のカンバスだ。

布で巻かれ、荷造り用のロープが十文字に掛けられている。いかにもおざなりな梱包のしかただった。

親父（おやじ）の絵なんて、見るのも嫌だ。

一成のつぶやきが聞こえる気がした。

ロープをほどき、布を取り去る。

「あ……。」

息を飲みこんでいた。心臓が鼓動を打つ。その音が耳に響いた。

どくん。どくん。どくん。

花火の絵だった。

夜空を背景に無数の花火が開いている。あるものは丸く、あるものはしだれ柳のように、あるものは噴水に似た形で。

花火と空より他のものは何も描かれていなかった。人も建物も木々も岩も、何一つない。花火だけしかない。

紅（あか）、橙（だいだい）、臙脂（えんじ）、黄色、金色、碧（みどり）、青……そして、言葉では表せない無数の色が五十号のカンバスいっぱいに広がっている。

(2) 迫力があった。美しいとか上手（うま）いとかではない。見る者を圧倒するような迫力があった。花火一つ一つに生命があって、その生命をせいいっぱい、見せつけているようだ。

大きな力、大きな何かが、こちらにぐいぐいと迫って来る。

これは祖父の執念だろうか。一瞬のうちに消えてしまう花火をカンバスに永遠に留（とど）めようとする執念だろうか。

一瞬を永遠にしてしまう。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製･転載を禁止します。

祖父はそんな執念に突き動かされて、この絵を描いたのだろうか。
わからない。考えてわかることではないのだ。
どんな人だったんだろう。
家族も家庭もすてるほど絵にとりつかれた祖父とは、どんな人だったのだろうか。
汗が滴（したた）り落ちる。
身体中を汗で濡（ぬ）らし、一真は祖父の遺（のこ）したカンバスの前に立ち尽くしていた。

「へえ、おまえのじいさん、そんなすげえ人だったのか。」
久邦（ひさくに）がペットボトルの水を飲みほし、口元をぬぐう。
「すげえかどうかわからないけどな。」
「その花火の絵、見てみたいな。」
美穂（みほ）が空を見上げる。
一真、久邦、美穂、そして、杏里（あんり）。四人は水鳥公園の雑木林の中にいた。杏里と美穂はベンチにこしかけ、一真と久邦はブナの根本に座っている。今日も朝から太陽がぎらつき、最高気温は三十五度近くまで上がるらしい。けれど、雑木林の中はひやりと冷たい。池の水面を渡った風がそのまま吹き込んでくる。久邦曰（いわ）く「無料の天然休憩室」だった。
杏里がオレンジジュースの缶を握り、身を乗り出してきた。
「お父さんは、市居くんが屋根裏部屋に上がったこと、知ってるの。」
「ああ、知ってる。というか、おれが親父に話した。」
「自分から話したんだ。」
「うん。」
「お父さん、なんて？」

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製･転載を禁止します。

「うん……。」

夜、仕事から帰ってきた父と向かい合った。屋根裏部屋に上がり、祖父の作品を見たこと、圧倒されたこと、自分もまた絵の道に進みたいと思っていること。全てを隠さず話した。そして、最後に一番大事なことを伝えた。

「おれ、じいちゃんの絵に圧倒された。最初に見た時もガキだったけど、ガキなりにすごい衝撃を受けたんだと思う。それは事実なんだけど、でも……何というか、わかったんだ。おれの描きたいものとは全然、違うんだって。どこが違うかうまく説明できないけど、おれは、じいちゃんを追いかけるんじゃなくて、おれの描きたいものを描いていきたいんだ。じいちゃんのように急がない。ゆっくりと自分が選んだ道を進みたいって、そう思っている。父さん、おれ、自分で選びたいんだ。」

一成は黙っていた。(3)黙ったまま、息子を見つめている。

「あなた、お願い。一真の言うことを。」

「おまえは口をはさむな。」

祥子の言葉をぴしゃりと遮って、一成はもう一度、息子を見つめた。

「描きたいものが、あるわけか。」

「うん、ある。人物なんだけど、どうしても描きたい人がいるんだ。」

「自分で選んだ道をなんて、そんなに甘いものじゃないぞ。いつまでも夢だけじゃ生きていけない。現実は厳しい。おまえが思っている何十倍もな。」

わかっているとは答えられなかった。現実の過酷さも非情さも、何一つ知らないのだ。でも、描きたかった。描くことを諦めたくはなかった。諦めるつもりもなかった。

「好きにしろ。」

一成が立ち上がる。ふいっと横を向いた。

「そのかわり、自分で道を選んだのなら泣き言は言うな。失敗しても挫折しても、誰かのせいにはできんのだ。」

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

(4)<u>今度は答えられた。</u>

「わかってる。」

杏里がふっと身体の力をぬいた。

「すごいね、市居くん。お父さんにちゃんと伝えられたんだ。」

「ちゃんとかどうかは、わかんないけどな。」

「伝えようとしただけで、すごいよ。」

「どうかな。」

久邦が真顔で言った。

「まだ始まったばっかだぜ。すごいかすごくないか、何もかも、これからだよな、一真。」

「おっ、ヒサ、今日はやけにクールじゃん。」

美穂がにやりと笑う。

「けど、その台詞（せりふ）、何かのドラマで聞いたことあるんだけど。」

「いてっ。ばれちゃった。いてててて。」

久邦が頭を抱える。杏里と美穂の笑い声が重なった。一真も笑う。

そうだ。まだ、始まったばかりだ。何もかもこれからだ。

(5)<u>一真は顎を上げ、深く息を吸い込んだ。</u>

（あさのあつこ「一年四組の窓から」より）

〔注〕　五十号――カンバスの大きさの規格。五十号は、一般に風景画の場合、縦一一六七ミリメートル、横八〇三ミリメートルとされる。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製･転載を禁止します。

〔問1〕（1）薄暗い室内に視線を巡らせる。目を凝らす。とあるが、この表現から読み取れる一真の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　薄暗い中では遺品である祖父の絵を見つけることができず、本当に置いてあるのかと不安になりながら、隅々まで確かめている様子。

イ　自分が心を引きつけられた祖父の絵を見つけるために、ほの暗い部屋の中を見回し、それらしい物に気づいてじっと見つめている様子。

ウ　祥子の話を思い出しながら、花火を描いた祖父の絵を保管した一成の真意について思いを巡らし、遺品の数々を念入りに見ている様子。

エ　保管してある祖父の絵と出会ったのは運命なのかを確かめて、祥子に早く伝えたいと思い、わずかな明かりの中を必死に調べている様子。

〔問2〕（2）迫力があった。美しいとか上手（うま）いとかではない。見る者を圧倒するような迫力があった。花火一つ一つに生命があって、その生命をせいいっぱい、見せつけているようだ。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　祖父が花火を鮮やかに描くために用いた色の多さに圧倒されている一真の姿を、様々な角度からありのままに表現している。

イ　祖父の絵の魅力について一真が客観的に分析しながら説明する様子を、時間の経過とともに一つ一つ順序立てて表現している。

ウ　夜空と花火だけを描いた祖父の力強い絵を見て一真が感銘を受けていることを、語句の繰り返しとたとえを用いて表現している。

エ　花火が開く一瞬を描いた祖父の絵と動揺している一真の心の動きとを、細部まではっきりと対照的に描き分けて表現している。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製･転載を禁止します。

〔問3〕 (3)黙ったまま、息子を見つめている。とあるが、この表現から読み取れる一成の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　一真の言葉をしっかりと聞き、生き方を自分で選ぶことについて一真がどれほど真剣に考えているのかを見極めようとしている様子。

イ　仕事から帰ってきたばかりの自分に対して一方的に話し続ける一真の姿に驚き、何と言ったらよいのか分からずに戸惑っている様子。

ウ　祖父の絵の魅力についてうまく説明できずに困っている一真に対して、どうしたら励ますことができるかをじっくりと考えている様子。

エ　屋根裏部屋に大切に保管していた祖父の絵を一真が勝手に見たと知り、不快に感じつつも一真の反省の程度を確かめようとしている様子。

□

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔問4〕 (4) 今度は答えられた。とあるが、一真が「今度は答えられた」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　投げやりな態度を示した一成にいきどおりを覚え、本当は分かっていないのにもかかわらず、答えてみせることで反発したかったから。

イ　思いつくままに話した自分の考えが一成から好意的に受け入れてもらえたので、将来に対する不安がなくなり、勇気がわいてきたから。

ウ　人生について悲観的に話す一成の言葉を聞くことで、それまで実感できなかった現実の過酷さや非情さについて、十分に理解できたから。

エ　責任を負うつもりがあるなら、生き方を自分で決めてよいという一成の言葉を聞き、途中で投げ出さずに絵の道を進む覚悟をもったから。

〔問5〕 (5) 一真は顎を上げ、深く息を吸い込んだ。とあるが、このときの一真の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　杏里と美穂の笑い声を聞くことで、自分を励ましてくれる友の存在の大切さを実感し、これからも助け合おうと心から思っている。

イ　美穂と久邦のやり取りを聞くことで、深刻に悩む自分には面白味がないと感じ、これからは悩むことなく明るく生きようと思っている。

ウ　久邦から言葉をかけられたことで、自分は出発点に立ったばかりだと気づき、ここから新たな一歩を踏み出そうと前向きに思っている。

エ　杏里と話すことで、自分の考えを一成に伝えられたか不安になり、正しく理解してもらうために改めて訴えようと強く思っている。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

四　次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

これまでの歴史研究では、食生活に関する問題が、本格的に取り上げられることは、ほとんどなかった。その原因については、二つの大きな理由が考えられる。まず一つには、日常生活に関する史料が非常に残りにくく、ことに文献を中心とする歴史学では扱いきれない、という研究条件の難しさがある。もう一つは研究者自身が、日常生活の歴史を研究することの意義を、十分に自覚してこなかったことがあげられる。（第一段）

確かに食生活史の対象は広く漠然としており、法律とか政府などといった社会制度、もしくは政治的な事件などとは違って、時間的な推移や変化などを明確にすることが難しく、学問の対象として扱いにくい。それゆえ従来の歴史学は、人間の生活一般にあまり注目しない、という研究史上の問題があった。（第二段）

生活史研究の弱点である史料の残存性の問題については、文献史料に限定せず、隣接諸科学の成果を積極的に学び、資料の数をさまざまな方法で増やしていくほかはない。幸い考古学や民俗学は、無名の人間の生活にかかわる資料が多い分野で、生活史に関しては豊富な知見が期待できる。（第三段）

また文献史料にしても、これまで創作という観点から敬遠してきた文学作品にも広く眼（め）を向け、生活に関する文献事例を数多く集める必要があろう。もちろん多くの歴史研究者が、これらの分野の史料の活用に、慎重であったことにはそれなりの理由があり、文学作品における真偽の確定は簡単ではない、という事情がある。しかし史料の数に制限がある以上、そうした冒険をあえて試みなければならないところに、生活史研究のおかれた苦しい状況があるとすべきだろう。（第四段）

たとえば考古学は、モノを根拠とする学問で、出土物が含まれる層位の年代関係や、土器などの形状変化などによって、かなり厳密に相対年代を割り出すことができる。(1)ただ細かな絶対年代の決定は難しいが、これは必ずしも生活史研究にとっての致命的な欠陥ではない。（第五段）

また過去の人々の生活に用いられた道具や、生活した空間その他を直接に対象とすることができる、という大きな利点があるが、考古学の最大の弱点は、美術的な伝世品を除けば、出土されたものだけしか研究の対象とはならない、という点にある。（第六段）

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製･転載を禁止します。

これは原則的には文献史学も同じであるが、人間の生活のあり方を探究する生活史の立場からすれば、証拠が残っていないものは、すべて無視するというのも不合理なことであろう。文献・遺物が残らないという状況のなかでも、過去の人間がどのように生活していたのか、ということを追究しようとする努力が重要で、想像力を総動員してでも真実に近い判断を下す必要があろう。（第七段）

日本語では〝衣食住〟と呼び慣らわされているが、英語では食・衣・住の順となる。やはり人間の生活の基本は食生活にあり、これが欠けると生命が維持できない。人類の歴史を振り返ってみると、猿人から原人・旧人さらに新人へと進む過程においては、食料の安定までの期間が非常に長く、逆にそれ以後に観念を発達させるために要した時間は、ほんのわずかなものにしかすぎない、という事実に突きあたる。（第八段）

人間の営む生産活動の基本には、食料の獲得という大問題があり、いかに第三次産業が発達した社会でも、結局は分業に支えられた食料調達のシステムが確立されている、ということが大前提なのである。歴史とは過去の人間の活動の総体であることから、その基礎となる食料の獲得と分配とが、大きく社会を規定したはずで、食生活が歴史に占めた位置は非常に重要であった、と考えなければならない。（第九段）

しかし、これまでの食物史の最大の関心は、食料の消費の部分にのみ集中し、なにをどう食べたか、という課題に終始した観がある。ところが食料の消費は、その生産に裏付けられねばならず、生産の過程に強く関与する共同体や国家の問題と分けることはできない。むしろ生産に共同体や国家の意思が働き、実際に権力が関与するからこそ、生産条件が確保され生産力の向上が期待されたのである。（第十段）

すなわち権力の生産への関与が、食料の社会的分配を強制的に行いうる根拠となり、こうした歴史の帰結として、共同体もしくは国家内に階級が成立するのだ、と考えるべきだろう。したがって歴史学としては、従来の食物史の成果に学んだうえで、食料の生産や配分の問題までも視野に入れる必要がある。それゆえ食生活が、歴史の展開にどのような役割を果たしたのか、また政治・経済や文化・宗教のあり方が、逆に食生活にどのような影響を与えたのか、を具体的に追究することが重要な課題となるのである。（第十一段）

たとえば食料生産の歴史的過程としては、まず採集活動からはじまり、食料の安定化のために、狩猟・遊牧・農耕という三つの社会的段階にいたる。しかし、この過程は単純ではなく、遊牧を選択するか農耕を選択するかで、その後の歴史の展開が大きく異なった。おそらく、このうちの一つをかたくなに守ってきたのではなく、それらの長所を取り入れ、両者を巧みに統合させて、多くの民族や国家は、それ

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製･転載を禁止します。

ぞれ独自の展開を遂げてきたのである。（第十二段）

もちろん、これらの軌跡は、それぞれの民族がおかれた地域的な気候条件、さらに歴史的な政治・経済の事情や、その過程で育まれた伝統的思考などに大きく規定され、長い歴史のなかでしだいに取捨選択が働いた結果であった。それゆえ、どのような生産活動をメインとしサブとしたかで、それぞれの社会の価値観が大きく異なった。（第十三段）

遊牧社会では、衣類に動物性繊維が用いられ、住居のあり方も移動に適合的なスタイルが選択された。また農耕社会では、衣類には植物性繊維が重用され、集落の立地も農業との関係に左右された。食の選択が衣や住を規定することになるが、たとえば農耕社会では暦が発達し、節目節目で季節感が強調されるなど、文化の様相も異なる。さらには同じ農耕でも、コメやムギなど主要作物になにを選択するかで、具体的な歴史の展開も異なることから、食物が社会に占める意義には、きわめて大きいものがあるといえよう。（第十四段）

それゆえ食生活は、それぞれの文化の重要な構成要素ともなる。(2)その社会に適合した食料生産の技術は、間違いなく文化の一部であり、どのように食べるか、という調理の技術や食事の方法も、同様に価値観の基礎を形成している。またすぐれた料理やこれを食するための洗練された＊嗜好は、まさしく文化そのもので、茶の湯のように総合芸術にまで発展する場合もある。いずれも、それぞれの民族の長い歴史のなかからおこり、徐々に改良が加えられつつ蓄積されたもので、多少の地域的な類似性はあっても、どの国々にも固有の食事文化が存在するはずである。（第十五段）

さらに食事文化といった場合には、調理の技術ばかりでなく、手や箸や匙といった食べるための道具や方法、さらには食にまつわる儀式や作法も重要な問題となろう。もちろん食料獲得のための儀式の遂行は、古くから共同体や国家の主要な行事でもあり、そうした人間集団の会合の際の食事には、必ずといってよいほど、その社会関係が反映するのだ、といえよう。（第十六段）

古い時代においては、特別な場合を除いて、一人で食事をするということは、原則として行われなかった。小は家族の食事から、大は国家的規模の饗宴まで、さまざまな場所で共食が行われた。共同で行う食事には、食物の供給という本来の目的のほかに、同じものを同じ場所で同時に食する行為を通して、人間としての共同性を確認する、という意味が込められている。仲間の宴会、恋人たちの食事、三三九度の盃、さらには「同じ釜の飯を喰う」という言葉に象徴されるように、共食によって、体験の共有もしくは無言の誓約、という確認を行ったことにさえなるのである。（第十七段）

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

(3)したがって饗宴や儀式などの場で、歴史的に行われる共食の意味を問うことによって、その背後にある社会関係を探ることも可能となる。すなわち、その民族の食生活のあり方が、歴史には直接的にも間接的にも反映されており、食生活史の研究は、それぞれの国の社会構造や歴史的特質を明らかにしうる可能性を秘めている。（第十八段）

（原田信男「日本人はなにを食べてきたか」より）

〔注〕嗜好（しこう）――人それぞれの好み。

〔問1〕(1)ただ細かな絶対年代の決定は難しいが、これは必ずしも生活史研究にとっての致命的な欠陥ではない。とあるが、「これは必ずしも生活史研究にとっての致命的な欠陥ではない」と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　生活史研究では、他の学問の研究成果や文献事例を積極的に活用し、当時の人間の生活のあり方を探究することが目的だと考えたから。

イ　生活史研究では、他の研究で敬遠されてきた文学作品を研究の中心として扱い、作品の真偽を明確にすることが目的だと考えたから。

ウ　生活史研究では、文献資料よりも価値がある考古学などの研究成果を利用して、食生活の変化を解明することが目的だと考えたから。

エ　生活史研究では、土器の形状変化など出土品について研究することで、道具が使用された年代を確定することが目的だと考えたから。

□

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔問2〕 第十段と第十一段との関係を説明したものとして適切なのは、次のうちではどれか。

ア　第十段で補足したこれまでの考え方について、第十一段では根拠を明らかにして論の妥当性を主張している。

イ　第十段でまとめた内容について、第十一段では対照的な事例を挙げて別の見解を提示している。

ウ　第十段で示した新たな論点について、第十一段ではその要点を整理して論の展開を図っている。

エ　第十段で述べた問題について、第十一段では具体的な事例を列挙して詳しく一つ一つを分析している。

〔問3〕 (2)その社会に適合した食料生産の技術は、間違いなく文化の一部であり、どのように食べるか、という調理の技術や食事の方法も、同様に価値観の基礎を形成している。とあるが、「調理の技術や食事の方法も、同様に価値観の基礎を形成している」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　食料生産の歴史的な変遷は複雑で、地域や社会の状況よりも民族としての考え方や価値観が生産活動を選択する要因だということ。

イ　衣類に使われる繊維の種類や住居の様式など、生活様式は選択した食料生産の方法によって決めることが社会の原則だということ。

ウ　日本語にも英語にも衣食住という言葉が共通して存在し、人間の生命を支える食生活のあり方は人類の歴史文化の根本だということ。

エ　生産活動の選択が社会の価値観を作り上げたように、料理の仕方や食べ方も長い年月の中で文化を形づくる基本の一つだということ。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製･転載を禁止します。

〔問4〕 (3)したがって饗宴や儀式などの場で、歴史的に行われる共食の意味を問うことによって、その背後にある社会関係を探ることも可能となる。とあるが、「背後にある社会関係を探ることも可能となる」と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　恋人や家族との食事のように、さまざまな規模がある共食には、古い時代から一人の食事を避けてきた社会的な背景があると考えたから。

イ　集団の食事には、食事を共にすることで同じ集団に所属することを確認するという、歴史と深い関わりをもつ目的があると考えたから。

ウ　集団の食事には、地域の中で発展した独自の目的があり、どの国にも他と類似しない固有の文化となって現代に残っていると考えたから。

エ　「同じ釜の飯を喰う」という言葉が表すように、同じものを同じ場所で同時に食べることが、食事を行う本来の理由であると考えたから。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製･転載を禁止します。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「食生活と歴史」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「 などもそれぞれ字数に数えよ。

25 100 200

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製･転載を禁止します。

五

次のAは松尾芭蕉の俳句とその俳句に関する対談であり、Bは芭蕉の弟子である支考が書いた芭蕉の俳句に関する文章の一部である。また、［　　］内の文章はBの口語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

古池や蛙飛こむ水のおと　　芭蕉

（「新編　日本古典文学全集」より）

森　広い意味で芭蕉は、自分に生きることとは何だということを問いながら、高く悟り、俗に帰ったところで大きく遊んでますね。

廣田　そういうことでしょう。それから伝統とのかかわりですが、これはよく知られている古池の句。あれができてから非常に芭蕉の名声が高まって、（笑）すぐあれを出しますから、みんな分り切ったように思ってる。ところが誰もよくは分ってないというふうな実状です。あの句は、支考の証言によると、まず「蛙飛込む水のをと」という中七・下五ができた、――それに＊其角なんかが「山吹や」と上五を付けたらどうだと提言したが、それを退けて、(1)けっきょく最後に芭蕉が、「古池や」と上五を決定したということです。「蛙」というのは日本の伝統では……。

森　山吹とくっつくでしょう。短歌の世界はみな山吹と蛙だから。古今、新古今の「＊かはづなくゐでの山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を」「＊かはづなく神なび川に影見えていまかさくらむ山吹の花」とか。蛙も河鹿でしょう。

廣田　それから、その山吹は日本の詩歌の伝統では、吉野川とか井手の玉川とかいった＊清冽な水流の岸に咲いてるものに定まっているんです。また「蛙」は必ず鳴声で詩歌の世界に入ってきている。泳いだり、飛び込んだりじゃないんです。そういうかたちは非常に強固な伝統で、万葉以来絶対動かせないかたちで伝わって来ている。その「蛙」を受けとって、今度は水に飛び込まして……。

森　(2)新しい発想ですよね。

廣田　その点では非常に大きな伝統への断絶というか、あるいは反抗といったものがあるわけです。しかも更にその飛び込んだ状況を決定するのに「古池や」ともってきます。これは吉野川でもない、井手の玉川でもない、山吹も咲いてないというところです。ではその古池とは何だというと、まさに彼の住んでる――俳諧師としての生き方を棄てて、自分の詩と真実を求めて孤独の世界に入り

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

こんだ、――その境涯をまさに示すものなのです。そういう境涯にあるから、蛙の飛び込む水の音が精神に響いてくるんです。注釈の類いなんかを見てみますと、蛙がドボンと飛び込んだとか、パチャンと飛び込んだとか、（笑）みなそう書いてるんですよ。これはカエルの体形や生態というものを全然知らない人が書くからです。カエルというのは体形が非常に流線型で水の抵抗が少(すくな)くできてる。前肢(まえあし)を両頰に付け、後肢(うしろあし)を斜(なな)め後(うしろ)へ伸ばして飛び込むから、非常にかすかなシャッという音しかない。その音を聞きつけるというのは、そもそも静寂な清閑の中に自分の生き方を求めてなかったら聞こえてくるものではない。だから、その音は、いい声だなと聞こえるような河鹿の声というふうなものでもない。つまり深川(ふかがわ)の草庵(そうあん)に入った芭蕉にしてはじめて聞きとりえた。そういうものを押(おさ)えて、その蛙はどういうところに聞きとめられたかというと、「古池や」だという。だからあれ以上に動かしようがない。古池「に」ではない、〝や〟です。(3)単なる場所の指示ではなくて、まさに深川の芭蕉庵を暗喩してる。

それで、あれを示されたとき、同時代の人人はあッと驚いた。これはみんな分ったんです、同時代の人には。しかもあそこで詩のことばとして見落(みお)としてはならないのは、「古池や蛙飛込む」、です。あれを「カエル飛びこむ」といったら、もう詩じゃない。

森　ええ、そうですね。

廣田　つまり、なぜ〝かわず〟だと詩になるか。これは日本の詩歌の伝統における「蛙」を、あの〝かわず〟ということばが背負っていて、われわれは〝かわず〟ということばで、否応(いやおう)なしに、『万葉』『古今』『新古今』以来の……。

森　(4)いわば河鹿を思い出すわけですね。山吹と河鹿を。そして、それをひるがえす。

廣田　和歌的優美の世界を必然的に思い出す。それを芭蕉は否定しかつそれと拮抗(きっこう)しながら、そういう否定と拮抗の微妙な均衡の間(あわい)に彼独自の世界を作り出しているから、あの「蛙飛込む水のをと」が詩になるんです。そういうものを切り離して、ただ写実主義的に考えて、芭蕉が古池のそばを歩いてた、カエルがポチャンと飛び込んで、彼はこの句を作った、なんていったら、それは解釈といえません。この句に対して、*一茶(いっさ)の「やせ蛙(がへる)負けるな一茶ここにあり」、あれはカワズじゃ困る。

森　カエルですよ。ことばの感覚というのは大事なことです。

廣田　つまり〝かわず〟ということば一つにもいかに大変な問題を含んでるかということです。伝統というものに回帰し、これを内面

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

に深く摂取しながら、しかも作品そのものをもって伝統と対決してる。その緊張し、照応し合う深微な力関係の中で、あれがはじめて詩として成立するんでして。詩にとってことばがいかに大事かということ、それは現代俳句もそのまま背負いこんでいる問題です。俳句という五七五の詩型と、それと関連して、これは季語もそうですが、全体が一つの詩ということばの空間構造がある。そういう詩の在り方が芭蕉によって新しく創られ、定められた。

（森澄雄・廣田二郎「芭蕉と現代」より）

B

春を武江(ぶかう)の北に閉(とぢ)たまへば、雨静(しづか)にして鳩(はと)の声ア ふかく、風やはらかにして花の落(おつ)る事おそし。弥生も名残おしき比(ころ)にやありけむ、蛙の水に落る音しば〳〵イ ならねば、言外の風情(ふぜい)この筋にうかびて、「蛙飛こむ水の音」といへる七五は得たまへりけり。晋子(しんし)が傍(かたはら)にウ はべりて、山吹といふ五文字をエ かふむらしめむかと、をよづけはべるに、唯(ただ)「古池」とはさだまりぬ。しばらく論之(これをろんずるに)、山吹といふ五文字は風流にしてはなやかなれど、古池といふ五文字は質素にして実也(なり)。実は古今の貫道なればならし。

（「芭蕉全集」より）

春を江戸の北、深川にある草庵で芭蕉がお過ごしになっていると、雨は静かに降って鳩の落ち着いた鳴き声が聞こえ、風は穏やかに吹いて花の散ることも少なかった。春（旧暦三月）の気配がまだ残る頃であったろうか、ときおり聞こえてくる蛙が水に飛び込む音に、言い表せない風情が感じられ、芭蕉は「蛙飛こむ水の音」という中七・下五をお詠(よ)みになった。側(そば)にいた弟子の晋子（其角）が、「上五として『山吹』をかぶせたらどうでしょうか。」と心得顔で言ったけれども、芭蕉は、「古池」と決めた。

山吹がよいのか古池がよいのか、しばらく議論したところ、山吹という五文字は風流で華やかではあるけれど、古池の五文字の方が質素でいて実情がある。実情こそが昔も今も和歌を貫く根本だからなのである。

〔注〕其角(きかく)――江戸時代の俳人。晋子は別号。

かはづなくゐでの山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を
――河鹿の鳴いている井手の里の山吹はもう散ってしまった。花の盛りのときに出会いたいものだったのに。
かはづなく神(かむ)なび川に影見えていまかさくらむ山吹の花

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製･転載を禁止します。

――河鹿の鳴いている神奈備川に影を映して、今頃咲いていることであろうか、山吹の花が。
清冽(せいれつ)――水などが清らかで冷たいこと。
一茶(いっさ)――江戸時代の俳人。

〔問1〕 (1)けっきょく最後に芭蕉が、「古池や」と上五を決定したということです。とあるが、Bにも、「『古池や』と上五を決定した」と文考が書いた部分がある。その部分を抜き出したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア　「蛙飛こむ水の音」といへる七五は得たまへりけり
イ　唯「古池」とはさだまりぬ
ウ　古池といふ五文字は質素にして実也
エ　実は古今の貫道なればならし

〔問2〕 (2)新しい発想ですよね。とあるが、「新しい発想」の内容を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　芭蕉は作品の中で、清流の岸に咲く山吹という詩歌の伝統的な題材を、古池と取り合わせることで独自の表現を試みたということ。
イ　芭蕉は作品の中で、短歌の約束事である蛙と山吹の組み合わせを用いることで、情景に奥行きと伝統的な美を取り入れたということ。
ウ　芭蕉は作品の中で、蛙と美しい鳴声という伝統的な構図に加えて、蛙の泳ぐ動作や古池に飛び込んだときの音を表現したということ。
エ　芭蕉は作品の中で、山吹と蛙の鳴声という日本の詩歌の伝統的な題材の組み合わせに従わないで、蛙の動きに着目したということ。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔問3〕 (3)単なる場所の指示ではなくて、まさに深川の芭蕉庵を暗喩してる。とあるが、ここでいう「深川の芭蕉庵を暗喩してる」を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　蛙の飛び込む音が聞こえるほど静寂な中にある古池を示すことで、生き方を求めて移り住んだ庵を直接表現せずに想像させるということ。

イ　芭蕉が蛙を見つけた池の場所を強調して表現することで、伝統である吉野川や井手の玉川と共に深川の庵を暗示させるということ。

ウ　蛙の美しい鳴声が聞こえた場所として庵の近くにある古池を直接表現することで、当時の人々に芭蕉の生き方を思い出させるということ。

エ　蛙が潜んでいる暗く寂しい古池の様子を描くことで、孤独な生活を送った深川の粗末な庵の様子を間接的に理解させるということ。

□

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔問４〕(4)いわば河鹿を思い出すわけですね。山吹と河鹿を。そして、それをひるがえす。という森さんの発言が、この対談の中で果たしている役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　「かわず」だと詩になるという廣田さんの発言を不思議に思い、真実かどうかを確かめようと具体的な事例を挙げている。

イ　和歌において「かわず」が伝統的な言葉であるという廣田さんの分析を理解し、それとは異なる観点からの説明を求めている。

ウ　「かわず」から河鹿を連想するという廣田さんの独自の解釈に興味を抱きつつも、現時点での疑問点を整理しようとしている。

エ　和歌の伝統である「かわず」を用いた効果についての廣田さんの意見に賛同し、簡潔にまとめることで次の発言を促している。

〔問５〕文中の――を付けたア～エのうち、現代仮名遣いで書いた場合と異なる書き表し方を含んでいるものを一つ選び、記号で答えよ。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製･転載を禁止します。

〈Note〉

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製･転載を禁止します。

二〇一七年度

東京都公立高校入試問題

一

解答

(1) くったく　(2) へだ(てて)　(3) ちょうやく　(4) かへい　(5) そで

二

解答

(1) 著(しく)　(2) 善戦　(3) 財源　(4) 洋館　(5) 浴(びる)

三

解答

〔問1〕イ　〔問2〕ウ　〔問3〕ア　〔問4〕エ　〔問5〕ウ

解説

〔問1〕「どこにあるのだろう。あの絵は」と薄暗い室内を見回していると、「タンスの後ろに白い布の包み」が見え、探している祖父の絵なのかもしれないと思ってよく見ている。

〔問2〕「迫力があった」を二度繰り返していることや、その「迫力」について、「生命をせいいっぱい、見せつけているようだ」と表現しているところに着目する。

〔問3〕あとの「現実は厳しい」「好きにしろ」「そのかわり…泣き言は言うな」といった一成の言葉に着目する。息子の決意がどれほどのものかを確かめた上で、覚悟があるのなら自分で選んだ道を進みなさい、と言っている。

〔問4〕「失敗しても…誰かのせいにはできん」という一成の言葉に対し、「わかってる」と答えた一真は、自分で選んだ道なのだから、どんなにつらいことがあっても諦めずに絵を描いていこうと決意している。

〔問5〕「まだ始まったばっかだぜ」という久邦の言葉を聞いて、「そうだ…何もかもこれからだ」と一真は思っている。いよいよこれ

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

から絵の道を進んでいくのだと実感し、深呼吸をして気持ちを新たにしている。

四

解答

〔問1〕ア　〔問2〕ウ　〔問3〕エ　〔問4〕イ

〔問5〕（例）

昨年末、おせち料理を作る母の手伝いをしました。その時、おせち料理は家族の健康などを願う料理であること、三が日に食事を作らずに済むように日もちのよい料理にすることを聞き、料理の歴史に興味をもちました。

食生活史の研究は、それぞれの国の歴史的特質を明らかにする可能性を秘めていると筆者は述べています。私は身近な料理を通して日本の歴史や文化の特質を学び、伝統を他の人に伝えられるようになりたいと思います。（200字）

解説

〔問1〕生活史研究は、「過去の人間がどのように生活していたのか…追究しようとする努力」「想像力を総動員してでも…判断を下す」ことが重要だと述べている。そのため、残存史料が少ないこともあり、考古学や民俗学だけでなく、文学作品にも目を向けるなどして資料の数を増やしている。

〔問2〕第十段の「生産に共同体や国家の意思が働き…生産力の向上が期待された」という内容を第十一段の「すなわち」以降でまとめ、その上で「歴史学」の「重要な課題」へと論を進めている。

〔問3〕直前の「食生活は、それぞれの文化の重要な構成要素ともなる」に着目する。「どのような生産活動をメインとしサブとしたかで、それぞれの社会の価値観が大きく異なった」のと同様に、食生活のあり方も「社会の価値観」、すなわち「文化」の構成要素となりうるはずだと筆者は考えている。

〔問4〕共同で行う食事には、古い時代から「人間としての共同性を確認する」という意味があることをおさえる。また筆者は、民族の食生活のあり方が「歴史には直接的にも間接的にも反映されて」おり、食生活史の研究が「それぞれの国の社会構造や歴史的特質を明らかにしうる可能性」を持っていると述べている。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製･転載を禁止します。

五

解答

〔問1〕イ　〔問2〕エ　〔問3〕ア　〔問4〕エ　〔問5〕エ

解説

〔問1〕「其角なんかが…提言したが、それを退けて」に注目。芭蕉は其角、すなわち晋子の提案を受けた後、「古池や」と決定しているので、Bでも晋子の提案に着目し、その後で芭蕉が決定した内容をおさえる。

〔問2〕「短歌の世界はみな山吹と蛙」で、「『蛙』は必ず鳴声で詩歌の世界に入ってきている」という「非常に強固な伝統」があるにもかかわらず、芭蕉は「蛙」を「古池」に「飛び込まして」いる。「山吹も咲いてない」場所で、蛙の「鳴声」ではなくその動きを取り上げているところに、「伝統への断絶…あるいは反抗といったもの」を感じ、これを「新しい発想」と述べている。

〔問3〕場所について、「ではその古池とは何だというと…その境涯をまさに示すもの」と述べている。芭蕉は自身の「孤独」な「境涯」をそれとなく示す目的もあり、「古池」という場を俳句の背景として選んでいる。

〔問4〕「いわば河鹿を思い出すわけですね」は、前で廣田さんが言おうとしたことをまとめている。そして「それをひるがえす」という言葉を受けて、廣田さんは「それを芭蕉は否定し…詩になるんです」という論を展開している。

〔問5〕「au」は「ô」と発音し、また、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」になるので、エは「こうむらしめ」となる。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。